

受難のバオバブ

湯浅浩史

ゆあさ ひろし / 1940年神戸市生まれ。東京農業大学農学部大学院修了。東京農業大学教授。(財) 進化生物学研究所主任研究員。専攻は民族植物学、進化学、植物文化史。農学博士。著書に「花おりおり」など多数。

サンテグジュベリの名作『星の王子さま』は内藤濯氏の訳で長年親しまれてきた。それが原作の著作権保護期間が昨年切れ、新訳が倉橋由美子さんを初め、池澤夏樹氏、三野博司氏、小島俊明氏、また原文どおり『小さな王子さま』の題で山崎庸一郎氏と、相次いで出版された。

王子さまの言葉を借りて、サンテグジュベリの理想、生き方が語られる物語は、心に響く。二〇世紀後半に世界でもっとも愛読された文学のひとつであろう。ただ、わたしにはひとつ不満がある。星をこわす恐ろしい存在として、バオバブが書かれている点。バオバブは「恐ろしい種子」で、王子さまは毎朝芽を出した苗を引き抜くのを日課にしているという。

現実のバオバブは決してそうではない。多目的有用植物で、重宝されている。樹皮はロープや屋根材、外皮は胃薬に、大きな堅い果実は容器になり、種子の周りのバルブ質は甘酸っぱく、そのまま菓子として食べたり、水で溶かして飲む。マラウイではそのジュースが市販されているほど。種子からは油がとれ食用や化粧品になり、葉は野菜にされる。特にマリでは葉を摘みやすさように低く育てて貯え、乾期にはその乾燥葉を料理に使う。

昨年訪れたオーストラリアでは指ほどの太さの実生苗が野菜として売られていた。そして何より堂々

とした樹は、アフリカで、マダガスカルで、オーストラリアで、迫力ある景観を演出し、太い枝や幹は住民に置い、日中、日陰を与えてくれる。崇められる聖木も少なくない。

住民にとっては大切なバオバブだが、王子さまの星とはまったく相反する問題を抱える。次世代が育つていないのである。

バオバブの発芽には高温と十分な水分を必要とする。地球温暖化で気温の上昇という問題認識が行きわたったが、もっと深刻なのは、雨の降り方である。特に乾燥地で定期的に雨が降らず、年によって片寄る現象が起こっている。もともと少雨の地域なのに雨期に雨が降らない年があり、大変である。

バオバブは成木になると一年間降雨がなくても耐えられるが、乾燥下では種子は発芽せず、少雨では幼木は育たない。

加えて放牧のための野焼き。成木は火に耐えても、幼木はひとたまりもない。それにマダガスカル西部ムルンダウアのバオバブが林立する観光名所は、異常気象の巨大サイクロンで大木が次々と倒れ、くしの歯が抜けたようになってしまった。アフリカではソウが乾期に芽で樹皮をはがし、水分の多い材を食べ、傷めつける。

地球のバオバブも受難の時代を迎えている。



目次

JUNE 2006 6
月刊みんばく

01 エッセイ 世界へ世界から
受難のバオバブ
湯浅 浩史

02 特集 病い
文化としてのかぜ
近藤 英俊
糖尿病を生きる
浮ヶ谷 幸代

アトピーを病むということ
糸野 巧磨

伝説業の力 印楽 道子
ムスリムの「邪骨」 澤井 充生

黄色の日 信田 敏宏
病いを創り出した開発 石井 洋子

08 未来へひらくミュージアム
墨場としてのミュージアム
宮下 規久朗

11 表紙モノ語り
サンニ・ヤカーの仮面
鈴木 正崇

12 みんばくインフォメーション

14 万国津々湯々
パレスチナ「ハラメント」からの解放
池田 有日子

15 詩論、新論、理想論
民博シンボルマークのひみつ
山本 泰剛

16 外国人として生きる
講師の道をえらんで
許 耀華

18 地球を集める
アフリカン・ポップアート
「ティンガティンガ」
和田 正平

20 生きもの博物館
ヤマバチが「来る」季節
佐治 靖

22 フィールドで考える
アンティジャンへの鎮魂歌
柳谷 知可

24 企画展
「さわる文字、さわる世界
—— 触文化が創り出す
ユニバーサル・ミュージアム」
次号予告・編集後記